

一八世紀末対馬藩財政における朝鮮貿易の地位

——寛政二年（一七九〇）対馬藩の朝鮮公貿易史料を中心として——

鄭 長 野
成
一 暹

目 次

一、はじめに

二、朝日公貿易の動向

1、「兼帯の制」成立と貿易体制の整備

2、年例送使貿易の実態

3、その他雜物支給の諸形態

三、対馬藩の財政構造と貿易利潤

1、藩政改革と藩財政

2、寛政初期の財政収入と貿易利潤

3、寛政初期の財政支出と財政逼迫

4、藩財政窮乏と朝鮮貿易

四、むすびにかえて

一、はじめに

朝日間交易による貿易利潤が朝鮮側と日本側のどちらに入り、その利潤がどのように用いられたか、という問題は、朝日貿易の実態と共に、必ず究明しなければならない重要な問題である。にもかかわらず、これについての研究は、管見の限り、まだあまり多くはないとみなされる。⁽¹⁾

これまでの研究結果を見れば、一八世紀中期以降、日本の場合、私貿易の不振による貿易利潤減少の結果、朝鮮貿易の担当者であつた対馬藩の財政がひどく悪化したとみなし、藩財政逼迫の主因は直接に朝鮮私貿易の不振によるものとみてきたようである。

例えば中村榮孝氏は、朝鮮貿易の藩財政との密接不可分な関係を強調し、藩財政悪化の主因として私貿易不振を挙げておられる。⁽²⁾

また、森 晋一郎氏は、『館守毎日記』（国立国会図書館所蔵宗家記録）を用いて、安永年間の私貿易の「存在」を明らかにし、私貿易「断絶」ということが、幕府からの拝領金をもらうための対馬藩の苦肉の策で、全くの虚構だったことを究明された。⁽³⁾だが、同氏は、近世後期に変質した私貿易が安永年間にもかなりの規模で行われていたといえ、決して藩の財政不足を補いきれるものではなかったと述べておられる。⁽⁴⁾財政逼迫の原因を朝鮮貿易の不振のみに見ている訳ではないが、主な原因を貿易利潤の減少にみているのではなからうかと思われる。つまり一七七六年（安永五）以降の朝鮮貿易と対馬藩財政との関係は、「私貿易衰退—藩財政悪化—幕府補助金支給」というふうにみられ、貿易衰退と藩財政悪化との両者を直接に結び付けているようである。この点においては、当時の対馬藩の公式見解と一致するとみなされる訳である。

一方、これと異なる意見もある。貿易発展期よりは確かに減少したものの、貿易から得られる利益が、対馬藩にとつてやはり藩収入源として大切な地位を占めていたとみなす田代和生、鶴田啓、両氏の見解がそれである。⁽³⁾

ところで、貿易衰退による藩財政悪化という見解に対して、筆者は次のような疑問を提起せざるを得ない。

第一、一八世紀中期以降、朝日貿易で日本側（対馬藩）がかなりの赤字を記録しはじめたかどうか。

第二、朝鮮貿易による利潤が、藩財政収入源として無視できるほどの微々たる存在となつてしまつたのか。

第三、対馬藩が朝鮮貿易を結局断念し、そのかわりに幕府補助金のみに依存するようになったのであろうか。

このような疑問についての明確な解答を提示しないまま通説に従うと、近世後期朝日貿易の実相に対して重大な誤解が起るかも知れない。財政収支上の歳入と歳出の両面を同時に考慮しないまま、収入構成の一部の朝鮮貿易利潤の減少の側面だけを強調しすぎる場合起る誤解がそれである。

近世後期朝日貿易そのものの実態究明と共に、貿易利潤の歴史的転化過程についての考察が切実に求められる所以がここにある。この点において、貿易衰退期である一八世紀末頃の対馬藩の史料、『古拝借御金御上納御有免筋御願立ニ付御身代之姿松平越中守様江被及御内意候御願等之別録』⁽⁴⁾（寛政二年、一七九〇）を基本史料として、「貿易衰退―藩財政悪化―幕府補助金支給」という通説を検討してみることによつて、近世後期対馬藩財政における朝鮮貿易の歴史的地位を位置づけようとするのが本稿の目的である。

注(1) 朝鮮貿易が全盛時代を迎えた元禄期についての研究結果によると、一六九八年（元禄十二）の対馬藩収入高中、私貿易利潤（二方役商売利潤分）の比重が五〇％、そして公貿易利潤（「送使所務分」・「送使方利潤銀」）のそれが三一％で、歳入総額の八割程を朝鮮貿易による利潤が占めていたことが明らかにされた（田代和生『近世日朝通交貿易史の研究』二六一頁）。また貿易衰退期の天明七年（一七八七）の身代出入の中にも朝鮮貿易利潤が算出されているが、貿易実態や財政状況の解明にはまだ不十分なところがあると思われる（森山恒雄「対馬藩」『長崎県史・藩政編』所収、吉川弘文館、一九七三年一〇五頁）。

(2) 中村榮孝『日鮮関係史の研究』下(吉川弘文館、一九七〇年)三三一頁。

(3) 森 晋一郎「近世後期対馬藩日朝貿易の展開―安永年間の私貿易を中心として―」(『史学』第五六卷第三号、三田史学会、一九八六年)第二・第三章参照。

(4) 同右、一四五(四〇七)頁。

(5) 鶴田 啓「天保期の対馬藩財政と日朝貿易」(『論集きんせい』第八号、東京大学近世史研究会、一九八三年、田代和生「近世後期日朝貿易史研究序説―『御出入積写』の分析を通じて―」(『三田学会雑誌』七九卷三号、慶応義塾大学経済学会、一九八六年)。

(6) 以下、『朝鮮公貿易且身代出入記録』と略(長崎県立対馬歴史民俗資料館所蔵宗家文庫記録類表書札方H①9)。これとはとどこかわらない内容の史料(同H①10の(3))が同文庫に入っている。内容的に大差はないものの、前者のH①9には「残不足銀」が三三〇貫三〇目餘と書いているが、後者にはそれが同三一八貫三〇目餘と書いている。この差についての幕府の勘定奉行よりの資料解明要求に対する対馬藩側の答弁の中で、「一四四貫目の入目銀数を一四二貫目と誤記した」という句節がある。そういう誤で不足銀が三三〇貫三〇目なのに、それを同三一八貫三〇目と誤記したということが、対馬藩側の解明であった(同H①8、『古拝借御金御上納御有免筋御願立ニ付御身代之姿松平越中守様江被及御内意候記録』の寛政元年(一七八九)十一月廿日条と同年十一月廿二日条)。この記録からみれば、おそらくこの史料は、幕府向けの報告資料であったとみられる。対幕府報告用の史料という点から出てくる史実の歪曲の可能性がないことではないが、当時の対馬藩の公式文書であったことは間違いないと思われる。これらの史料については『佐賀大学経済論集』第22巻第5号(一九九〇年)で紹介した。

二、朝日公貿易の動向⁽¹⁾

近世朝日貿易、とりわけ公貿易の取引体制の整備は、一七世紀中期の「兼帯の制」実施に始まった⁽²⁾。従来、外交・儀礼中心の中世的性格から脱皮し、純粹な貿易取引中心の近世的形態に転換して、公貿易の核心ともいえる「年例送使」貿易が確立されるようになったのも、この頃からである。

その後、明治政府によって、朝鮮の開港が強要された一九世紀末までの二〇〇年以上の間には、大体この形をそのまま維持するようになる。しかし、時代の流れによって、その内部構成に変化が現われはじまった。一八世紀末の公貿易の実態について以下に検討しよう。

1、「兼帯の制」成立と貿易体制の整備

一六〇九年（光海元、慶長一四）の「己酉条約」締結によって再開された近世朝日関係は、一六三五年（仁祖一三、寛永一二）を境界として大きな転換をなすようになる。政治的には「柳川一件」以降朝鮮との交易権が対馬藩においては藩主側に集中し、経済的には「兼帯の制」成立によって貿易仕法に重要な変化が起きた。

「兼帯の制」とは、（イ）己酉条約によって再調整された歳遣船二〇艘中、第一特送船が第二、第三特送船を兼帯し、また歳遣第四船が同第五船以下第一七船までを兼帯すると同時に、（ロ）例贈物（進上と回賜および公貿物など）はいったん代官へ送り、（ハ）求請中雑物は米で換算し支給することなどを核心とする、いわゆる渡航使船応接についての改善策である。

いうまでもなく、これは使船に対する接待費の過多支出のために財政難を被った朝鮮朝廷が財政支出の削減策の一環として提示したものであった。⁽⁶⁾しかし、「兼帯の制」実施がもたらした影響は意外に大きかった。

その中で何よりも大切な変化が、「年例送使」の確立である。従来、朝鮮へ定期的に派遣された渡航船には、特送船・歳遣船以外にも、受図書船・受職人船といわれる宗氏以外の諸個人の使船があった。⁽⁷⁾しかし、「柳川一件」の発生と「兼帯の制」実施などによって、これらの受図書船・受職人船が対馬島主に帰属されるようになって、次のように「年例八送使」と一応整理されたといえよう。⁽⁸⁾

表1で見えるように、従来いくつかに分散されていた朝鮮渡航船が八送使船と圧縮されたうえ、使船の渡航時期、乗船人数、倭館滞留日限などに至るまで、渡航様式が確立した。封進（進上）・公貿物に対する朝鮮側からの回賜・

表1 年例八送使一覧表

派遣月	名 称	兼 帯	寄 乗	船 数	再度	留館日限
1 月	歳遣第一船送使			本船 1 水木船 1	1 1	85日
	歳遣第二船送使		第三船送使	本船 1		85
	歳遣第三船送使			本船 1		85
2 月	以酏庵送使			本船 1	1	85
	歳遣第四船送使	第五～十七船		本船 1		85
3 月	一特送使	二・三特送使 中絶船		本船 1	1	110
				副船 1	1	
				水木船 1		
6 月	萬松院送使 (彦治送使) ¹⁾			本船 1	1	85 (85)
				水木船 1		
				(本船)	(1)	
8 月	副特送使			本船	1	110
				副船	1	
				水木船 1		

注：1) 彦満送使(義真公送使)は、寛永19年～元禄15年(1642～1702)まで渡航。この期間のみ年例送使は、「九送使」となる。

資料：本表は中村栄孝『日鮮関係史の研究』下、327頁所収の表を、田代氏が簡略し、また彦満送使を加筆したものを再引用した。田代和生『近世日朝通交貿易史の研究』(1981年)160頁。

代物支給が木綿(公木)で価格の提示ができたり、その木綿の一部の公作米で支給された「換米の制」が実施されるようになったことも重要な変化の一つである。

それとともに貿易決済が一ケ年単位で行われるようになってから、貿易経営が以前より安定的に拡大されることができる基盤が形成された。⁽¹⁾ そのかわりに貿易に伴う危険度つまり債務累積の可能性が更に大きくなった。⁽²⁾

このように一六三五年の兼帯制実施以降、その前までの複雑な中世的貿易形態が、「年例送使貿易」を中心として再整理されたことによって、朝日貿易は新たな時代を迎えるようになる。

それでは、本稿の分析時期でもある一八世紀末頃の状況は、どうなっていたであろうか。

2、年例送使貿易の実態⁽³⁾

本稿では一八世紀末頃の年例送使貿易の実態について考察しよう。近世初期と一九世紀

中頃のそれに対しては、田代氏によって、それぞれ分析されている。⁽¹⁴⁾しかし本稿では、貿易実態の分析にとどまらず、それを軸とした朝鮮貿易と対馬藩財政との関係までに分析を進めてみたい。

(1) 使船の種類

表2でみるように、朝鮮へ派遣された使船は八送使船と裁判差倭の二種類に大別することができる。ところで『増正交隣志』の記録のごとく、差倭はすくなくとも規定上では、特定の用務がある場合に不定期的に派遣されることになっているので、ここではいったん論外にしよう。

そうすれば一八世紀末頃の年例送使も、近世初期のそれとほぼ同じであることがわかる(前節表1参照)。史料『朝鮮公貿易且身代出入記録』(二七九〇年)には、渡航使船についての詳しい説明が書かれていないが、第一、第二、第三、第四船送使と以酌庵送使、一特送使、萬松院送使および副特送使などの八船と記している。⁽¹⁵⁾これで見ると、兼帯制成立によって確立した「年例送使」貿易が一八世紀末頃にも依然としてつづいてきたことが窺える。

(2) 貿易品目

① 輸出品(日本→朝鮮)

全体的に見れば、一八世紀末頃においても、近世初期のそれと大きな差はみられないが、いくつかの点で特徴が出ている。とりあえず日本側の輸出からみることにしよう。全一四品目の輸出品中、胡椒・明礬・丹木(蘇木)・水牛角(黒角)の四品は、朝鮮前期以来、やはり日本からの輸出の中心をなしている。⁽¹⁷⁾珍しく全部南方物産である。⁽¹⁸⁾これらの品目は、長崎→対馬を通じて朝鮮へ輸出された。⁽¹⁹⁾朝鮮の貴族層で、これらに対する需要が結構あったので、⁽²⁰⁾この需要が日本との交易によって充足されたはずである。朝日公貿易の性格の一端を窺わせる重要なところであるといえよう。

その外、日本朱・紋紙・蒔絵台付硯箱・銅野風呂・金小屏風・銅入子手洗などの八品がみつかるといえる。大体、手細工

1. 日本への輸出 (日本→朝鮮) 表 2 年例送使貿易 (18世紀末)

	第1 船送使	第2・3・4 船送使	以雨庵送使	1 特送使	萬松院送使	副特送使	裁判差倭	合計
胡椒 (斤)	500	—	200	2,500	500	400	—	4,100
明礬 (斤)	300	—	—	900	200	—	—	1,400
丹木 (斤)	1,025	480	340	2,100	700	1,100	—	5,745
荒銅(生銅) (斤)	2,800	5,000	800	13,900	1,100	4,000	300	27,900
吹銅 (斤)	645斤112匁	270斤96匁	160斤32匁	3,322斤32匁	417斤48匁	1,582	102	6,500
水牛角(黒角) (本)	435	—	—	—	—	—	—	435
日本朱 (斤)	2	—	—	6	—	—	—	8
紋紙 (枚)	300	—	—	—	—	—	—	300
蒔絵家入鏡 (面)	—	—	1	—	—	—	—	1
蒔絵丸盆 (束)	—	—	—	1	—	—	—	1
蒔絵台付硯箱	—	—	—	1	—	—	—	1
銅野風呂	—	—	—	1	—	—	—	1
金小屏風 (双)	—	—	—	—	1	—	—	1
銅入り手洗 (組)	—	—	—	—	1	—	—	1

II. 日本への輸入 (日本←朝鮮)

	第1 船送使	第2・3・4 船送使	以雨庵送使	1 特送使	萬松院送使	副特送使	裁判差倭	合計
人参 (斤)	4斤100匁	—	2	13斤120匁	3斤100匁	6斤140匁	—	30斤140匁
虎皮 (枚)	2	—	1	6	1	2	—	12
豹皮 (枚)	2	—	1	9	1	3	—	16
油布 (疋)	4	—	3	15	3	5	—	30
紬布 (疋)	4	—	3	15	3	5	—	30
白布 (疋)	5	—	3	15	3	5	—	47
白木綿 (疋)	10	—	5	30	5	10	—	60
筆 (本)	50	—	25	195	40	55	—	365
墨 (挺)	50	—	25	195	40	55	—	365
大油紙 (枚)	—	—	2	9	—	3	—	14
鷹 (盾)	5	8	1	27	3	12	—	56
本綿 (疋)	6,592	4,460	1,565	27,717	3,432	10,766	670	56,045

注：年例送使貿易＝封進(進上)・回賜＋公貿易

資料：『永統御手当御拜受金老万式千両之配 朝鮮公貿易取遣之次第且御身代御出入當時之姿申上ひ書付』(対馬歴史民俗史料館所蔵宗家文庫記
録類表書札方H⑩10(8))と『古昔借御金御上納御免訪御願立ニ付御身代之姿松平越中守藤江被及御内意候御願等之別録』(同文庫記録
類表書札方H①9)。

品であるとみられるこれらの品物は、朝鮮へ渡した封進物であつたと思ふ⁽²¹⁾。

もう一つ著しいことは、近世初期までも日本の輸出品中、かなりの比重を占めてきた鐵が、輸出対象より除かれ、そのかわりに吹銅が朝鮮へ差し渡されている点である。これについて同史料は、

以前^者鐵壹万五千六百叁拾斤半相渡、寛文年比^方代銀^二而拾五貫六百拾叁匁五分相渡居^ハ處、其後銀差渡^ハ儀相止^ハ付、只今銅^二相渡申^ハ

と書き、鐵の代納が寛文年（一六六〇年代）以降、銀↓銅の順に変化したことを示している。

鐵の代銅であつた吹銅⁽²²⁾（六、五〇〇斤）以外にも、荒銅⁽²³⁾（生銅）が更に大量で輸出されている（二七、九〇〇斤）。これは近世後期にかけての日本の対朝鮮輸出が、公貿易でも依然として銅中心に行われてきた事実を証明しているのだと思われる。

②輸入品（朝鮮↓日本）

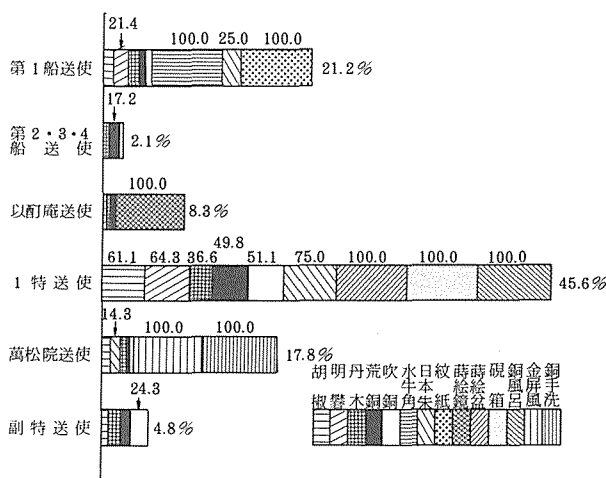
『朝鮮公貿易且身代出入記録』（寛政二年）によると、人參・木綿・米と共に、封進に対する回賜品とみられる虎皮・豹皮と織物類（油布・紬・白布・白木綿）、筆器具（筆・墨・大油紙）および鷹などが、朝鮮から日本へ輸入されたとなつている。大体朝鮮産と思われるこの輸入品も、ほとんどが日本の上部階層の需要物であつたとみなされ、当時の貿易の性格の一端を示唆するものであると思う。

とにかく輸入品の場合にも、近世初期のそれに比べると、黒麻布と花席などがみえないだけ、その外は一八世紀末の輸入品目ほとんど変化がなかったことがわかる。

この外、木綿（公木）の一部を朝鮮米に交換してもらつた「換米の制」の問題や雑物支給の問題などがあるが、これらについては後述することにしよう。

(3)貿易額

図1 使船別輸出品構成 (18世紀末)



注：表2から作成。

表2にも示したように、『朝鮮公貿易且身代出入記録』には、輸出入額が渡航使船別に記載されている。ところで第四船送使の貿易額が、第二、第三船送使のそれと一緒に合算されていることは注目すべきである。近世初期に確立した年例送使制度通りならば、第四船送使は二月に派遣されることとなっているのに反して、第二、第三船のそれは一月になって、渡航時期がそれぞれ違う。にもかかわらず、これらの貿易額が合算されているわけである。どこに基因したか分りがたいが、年間貿易の総額には差がないので、本稿では一応史料の記載様式に従うこととする。

①使船別輸出品 (日本→朝鮮)

とりあえず著しいことは、第一特送使の比重が大きいである所にある。図1によれば、胡椒の総輸出品中、第一特送使船の比重が六一・一%、明礬、吹銅がそれぞれ六四・三%、五一・一%で、輸出品の半分以上を第一特送使船が占めている。丹木(三六・六%)と荒銅(四九・八%)の比重も、ほかの使船より高い。更に蔴絲丸盆・蔴絲台付硯箱・銅野風呂などは、第一特送使船にしかない。これを全品目の平均で見れば、第一特送使船が全体の四五・六%の高い比重を占めていることがわかる。

その反面、以酏庵送使、第二、第三、第四船送使の比重は低く、第一特送使の場合と著しい対照を見せている。とりわけ第二、第三、第四船送使は、丹木と銅(荒銅・吹銅)の二品目のみに限られ、非常に特徴的である。

更には第一船送使、萬松院送使、副特送使などが、一特送使につづいて高い比重を記している。

使船別輸出比重のこのような差異は、おそらく各使船における外交的重要度の差より出てくるものではなかろうかと思われる。まだ貿易（特に公貿易）が外交と明確に分離されていないということを物語っているのではなかろうか。この点もやはり近世朝日貿易の歴史的品格を現わすものであろう。

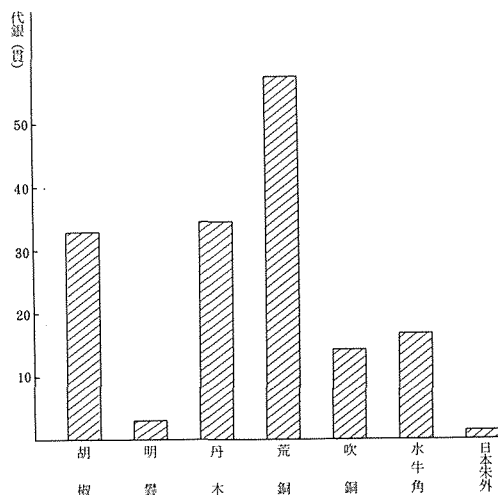
② 品目別輸出額（日本→朝鮮）

図2でもわかるように、日本から朝鮮への輸出品中、銅が最も大きな比重を占めている。代銀基準でみれば、荒銅五七貫四七四匁、吹銅一四貫八八五匁（以上、史料上の数字）で、あわせて全体輸出額中四四・六％に及ぶ。近世後半の貿易衰退期には、従前の銀のかわりに銅が輸出の主軸をなしていたことが、公貿易でもそのまま現われているといえる。

つづいて丹木（二一・五％）と胡椒（二〇・八％）がそれぞれ二割以上の比重を占めている。特に水牛角（黒角）の場合、第一船送使のみによって四三五本が輸出されたばかりであるのに、代銀基準でみると、一〇・二％程の割合を示す。²⁶中世以来、南方物産がまだ公貿易で大切な位置をしめていたと考えられる。

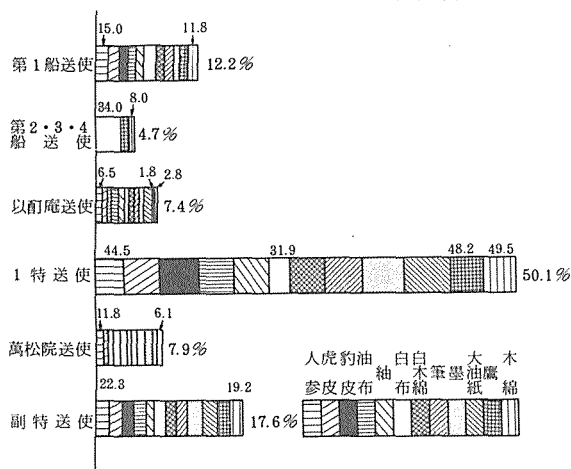
その反面、ほとんどが朝鮮朝廷への封進物だったとみられる其の他の八品の代銀合計は、史料によればわずか一貫五五三匁で、全輸出額の〇・九六％にすぎない。純粋な公貿易物の

図2 品目別輸出額（18世紀末）



資料：表2と同じ。

図3 使船別輸入品構成 (18世紀末)



注：表2から作成。

主宗とみられる銅・水牛角のそれが五四・八%にも達することは正反對である。
近世後期に至っても封進物がまだ外交的に重要な意味をもっていたものの、輸出額におけるその割合(四二%)が、純粹公貿物のそれ(五八%)に比べもつと低い。これからみて対馬藩にとっては、経済的利潤が更に大きい純粹公貿易を尊重したのではなからうか。この点からも輸入面の特徴を窺うことができよう。

③ 使船別輸入額 (日本↓朝鮮)

輸入の場合にもやはり特送使船の比重が著しい。人參(四四・五%)、白布(三一・九%)および鷹(四八・二%)などのいくつかの品目を除くと、第一特送使による輸入が、輸入総額のほぼ五割以上を占めている。とりわけ木綿(公木)の場合、全体輸入量五六、〇四五疋中、一特送使が四九・五%である二七、七一二疋をも占め、全体貿易での比重が大変大きかったことを実証的に示している。

その次に副特送使(一七・六%)、第一船送使(二二・二%)、そして萬松院送使(七・九%、以上、全体平均)の順序で高い割合を現わす。

それに反して第二、第三、第四船送使の比重は低い(四・七%で最下位)。にもかかわらず白布の場合は、図3でみるように、全体輸入量四七疋の中で、一六疋をしめ、もつとも大きな比重(三四%)を記していることが特徴的である。

一方、以酏庵送使は、依然として低い割合ではあるものの、輸

出の場合とは異なり、全品目にわたって少しずつ分布していることに注目すべきである。

全体的にみれば、輸出より輸入の場合が、使船別輸入品の多様であるし、一特送使を除くと、使船別輸入額に相対的に大差のないことも特徴の一つであると考えられる。

④ 品目別輸入額（朝鮮→日本）

いうまでもなく輸入品中、最も重要な意味をもっているのが米（公作米）と木綿（公木）である。『朝鮮公貿易且身代出入記録』によると、日本の輸出に対する代価として支給された木綿の総額五六、〇四五疋中、二万疋（四〇〇同）を「換米の制」にしたがつて、朝鮮米壹万六千俵（一俵五斗²⁹）で振替えてもらったことがわかる。それで残りの三六、〇四五疋は、現木綿で支給されるとか、あるいはその一部が滞納されるはずであろう。

ところで同史料は大変大切な事実を摘記している。残分中二九、〇四五疋（全体公木中五一・八%）を、ほかでもない人參・二四斤三二匁余に交換してもらい、その残り七千疋は現木綿でもらったと書いている。

右人參引替之儀現木綿^{ニ而}相請取^ル方勝手宜御席^ニ得共、朝鮮国^{ニ而}現木綿約定之數難相揃^ル与相見、以前^ニ現品全數相請取^ル儀無之、人參壹斤を木綿千貳百疋を以引替申候、然處人參上方筋^{ニ而}賣立直段之儀二十ヶ年以前直段宜節者、壹斤ニ付拾五六貫目程ニ賣申たる儀^茂御座^ニ處、近年者如何様之訳^ニ候哉、朝鮮人參相望^ル者少ク賣^レ方乏ク^ニ依、直段漸々引下ケ、壹斤ニ付七貫五百目位ならて賣立得不申^ニ、以前御免銀を以買調^ル節与違、只今^{ニ者}木綿千貳百疋^{ニ而}人參壹斤ニ引替^ル取計^ニ付、代銀差引仕見^ル得者、人參壹斤之代貳拾壹貫六百目ニ相当^リ、朝鮮^{ニ而}右之直段ニ請込^ル人參を七貫五百目ニ賣拂^ル時、貳拾四斤餘^{ニ而}參百四拾貫目程之損銀与相成不輕違目ニ付、約定之通現木綿入送之儀可申掛儀^ニ御座候處、現木綿入送之儀^者彼国（朝鮮→引用者）別^{ニ而}難渋仕年來漸々与右之こと^ト成來儀、只今新^ニ及掛合候時、彼方之聞請不宜者面^リ之儀^ニ有之、彼是入組^ル而^者異儀ケ間敷相成候事故、貿易利損之間を以入組等相生不申様、第一^ニ入念候儀^ニ有之、次^{ニ者}右入組等相生し、万一も諸入送物當時^{ニ而}茂相

滞⁽³¹⁾り得^者者、御身代之御繰合必至与被差支^付付、旁不得已右之仕合ニ御座^い、賣^而引替人參⁽³⁰⁾老斤拾貳參貫目ニ賣立、禮單人參⁽³¹⁾五六貫目位ニ茂相成候得^者者、損銀餘程輕^い儀ニ御座候へとも、貴キ品ながら賣^者商賣ニ仕^い品ニ^い得^者時勢不及力次第有之、引替人參も禮單人參合^而一ケ年ニ六拾斤程之數取入^い事故、日本御國中ニ難行渡程之斤數与相考^い處、右之通ニ候段不及是非儀共^ニ而^當惑仕^い儀ニ御座^い

これについての同史料の記録は右の分だけである。⁽³²⁾内容は大体、(イ)朝鮮側の現木綿の調達状況がよくなかったので、木綿の一部を人參でもらうようになったこと、(ロ)人參一斤で木綿一、二〇〇疋の割合だったから、人參一斤当りの輸入価格が二一貫六〇〇目に達するわけであること、(ハ)日本での販売価格が一斤で七貫五〇〇目余だったので、結局対馬藩の損銀が三四〇貫目程（實際は、24貫32匁×(21貫600目ー7貫500目)＝342貫912匁）になるが、こうしないと朝鮮からの諸入送物の滞納が起るためしかたがなかった、ということである。

更に同史料は、⁽⁴³⁾

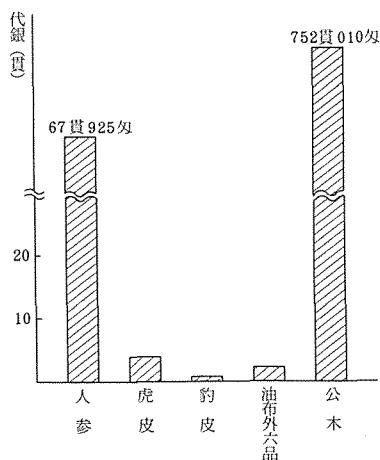
現木綿^ニ而^取入^い儀、四五千疋方七八千疋位迄^ニ而、其餘右申上^い通物替^ニ仕^い、尤年々多少御座^いを近年之取入高平均仕^い員數如此御座^い

と書き、現木綿の支給分の七千疋が、近年の平均であることを示し、結局木綿と人參の交換が、史書の記録年代の寛政二年（一七九〇）に限ぎることではないのを示唆している。⁽³⁴⁾

当時の状況からみて人參の調達もうまくいかなかったのに、二四斤程の人參がかなり長い間にかけてどう調達されたか。更に対馬藩の計算ならば三四〇貫目程の損銀をみるわけであるが、当時の対馬藩にとって、このような莫大な損害を長い間耐えることができたのか。今まであまり触れていない事実で、いろいろ疑問の出でくるが、本稿では藩の公式文書をもって対馬藩の公式見解について検討するところに目標を置こう。⁽³⁵⁾

とにかく図4で明らかであるように、木綿の比重が圧倒的である。代銀三〇七貫五三〇匁（公作米一六、〇〇〇

図4 品目別輸入額（18世紀末）



資料：表2と同じ。

などが主宗をなしたといえよう（第三章の表7参照）。日本から朝鮮への輸出品が、銅をはじめ丹木・胡椒・水牛角などを中心としていたことと対照されるところである。

3、その他雑物支給の諸形態

(1) 雑物支給の性格

渡航した使者に対して朝鮮側から支給された雑物について、田代氏は著書『近世日朝通交貿易史の研究』（一九八一年）で、次のように述べておられる。すなわち、「官営貿易以外に朝鮮側から使者に対して、接待・宴饗などに要する雑物が支給されていた。この雑物は、五日ごとに支給されるため、「オイリ（五日）の雑物」などと呼ばれていたが、兼帯の制成立によって、これもすべて米に換算して支給されることになった。これは初め使者個人の収入となっていたが、『対馬志』寛文三年（一六六三）条によると、（中略）、五日次雑物も藩庫に吸収されるようになったことが明らかにされる。」³⁶⁾

俵分は除外。以上、史料上の数字）で、全体輸入額中八〇・五%を占め、木綿の比重がどの位であったかをはっきりと示している。

その次は人參の割合（公木代給分、不包含）が高い。輸入量はわずか三〇斤一四〇匁にすぎないが、代銀六七貫九二五匁（史料上の数字）で、全体の一七・八%に及ぶ。

しかし虎皮、豹皮、油布などの輸入品の比重はあまり高くない。つまり米を除くと、木綿と人參が全体の九八・二%を占め、朝鮮から日本へ輸入された公貿易品は、米をはじめ木綿・人參

この雑物の性格については今後詳しく考察すべきであるが、おそらくこれは、反対給付を期待しない点で、「官営貿易」上の封進・回賜とは違うのではないだろうか。対馬藩に対する朝鮮朝廷の回賜は、礼物といわれるものの、それは確かにそれに相應する反対給付の封進を期待した上で行われた反面、雑物の支給は、すくなくとも物質的には、封進みtainな反対給付を望まない所に特徴がある。

とにかく、この雑物支給を史書の記録に出てくる「朝鮮公貿易」の範疇に含ませるかどうかが問題である。厳密な意味で、この雑物支給は「貿易」とはいえない。反対給付を期待しない一種の外交上の行為にすぎないためである。

しかしながら問題はそのように簡単でない。一八世紀末の公貿易がまだ近世的外交関係に強靱に包摂されている面が看過できない。それに加えて、実際この雑物支給による収入が、対馬藩庫に編入されていたことが明らかである。『朝鮮公貿易且身代出入記録』にも、年例送使貿易とは別に、「年條送使被差渡付彼国入送之米穀諸品」と書き、その内容を列挙している。

つまりこの雑物支給が、厳密な意味での貿易取引とはいえないものの、(イ)当時の公貿易が依然として近世的外交関係に強靱に包摂されていたこと、(ロ)雑物支給による収入が実際に対馬藩財政に編入されていたこと、(ハ)更にその支給額(代銀一二二貫三三二匁)が、肥前領地の年貢米(代銀三八九貫三四一匁)の三分の一に及ぶほどの無視できない収入源であった点などによって、「広義の公貿易」の範疇に雑物支給を含ませることとする。

(2) 雑物支給の実態

年例送使に対する雑物支給については、一応表3と整理できる。⁽³⁷⁾ 米・大豆・小豆と共に、筆・墨から絹風呂敷・布風呂敷に至るまで、様々な雑物が支給された。

その中で米・豆が最も大切なものだったの言うまでもない。とりあえず雑物支給によってもらった朝鮮米が、およそ四千俵以上で、公作米の四分の一に達するまでに多かつたのに注目すべきである。とりわけ米が少なかった

表3 年例送使に対する雑物支給 (18世紀末)

品 目	数 量	品 目	数 量
米	4,072俵 2斗6升	帆 蓆	58枚
大 豆	298俵 1斗7升	竹	481本
小 豆	13俵 4斗1升	簾	359束
筆	80本	松 材 木	4本
墨	80本	松 厚 板	5枚
胡麻油	2石9斗7升	大 油 紙	50枚
笠 紙	570枚	棗	1石7斗1升
葛 網	28房	胡 桃 子	1石7斗1升
萩皮網	12房	干 栗	1石7斗1升
打 釘	475本	松 実	1石7斗1升
折 録	345挺	馬 箸	71
筍	143枚	絹風呂敷	9
荒 苧	564斤	布風呂敷	16

注：1) 1俵 = 5斗入。

2) 鷹28居の代米420俵包含。

資料：表2と同じ。

計算されているのである。とりわけ大豆・小豆の場合は、近世後期にかけての「兼帯の制」に対する実証分析が求められる所以がここにある。つまり朝鮮からの雑物支給として、米四、〇七二俵二斗六升と、その他代銀合計九貫一〇六匁三分などが、対馬藩財政へ編入されたことは間違いない事実となっている³⁸⁾。

以上検討してきたように年例送使貿易と雑物支給などは、外形的には大きな変化はなかったが、その内部構成においては絶えずに変わっていったことを認めざるをえない。これらが赤字になるか、あるいは黒字になるかは、対馬

対馬藩にとつては、この雑物支給分が単純な外交慣行以上の重要な財政収入源としての意味をもっていたことは間違いない。換言すれば、これは朝鮮朝廷の財政負担の加重を意味することでもある。

ところで、もう一つの問題がある。同史料によると、大豆(二九八俵一斗七升)と小豆(一三俵四斗一升)を日本で売立して、その結果代銀がそれぞれ三貫五八〇匁、二七六匁(以上、史料上の数字)と出てきたことがわかる。それだけでなく、米以外の残り二三品の代銀が、五貫二五〇匁三分と計算していることも確認される。

いうまでもなく、これは「兼帯の制」の原則の違反である。「その他雑物をすべて米に換算し支給する」と規定されているにもかかわらず、このようにすべて代銀で

藩にとつて、決して軽視できない大切な問題であつた。

いわゆる貿易利潤に結び付いた問題については次の第三章でみることにしよう。

注(1) 本稿で「公貿易」ということは、史書の記録通りの「年例送使」貿易(封進・回賜・狹義の公貿易)と「雜物支給」の總称である(詳しい説明は第二章 第三節に後述)。私貿易を除外した公貿易のみについて分析するのには、いくつかの理由がある。(イ)史料の問題で、本稿で用いた史料は、幕府向けの報告資料だから私貿易関係の記録が出てこない。一七七六年(安永五)より始まった幕府拝領金の支給が朝鮮私貿易の「断絶」を根拠としたためである。(ロ)公貿易のみと藩財政との関係の分析によつて、対馬藩の公式見解の「貿易衰退―藩財政悪化」について検討するところに本稿の目的があるためである。『館守毎日記』の分析による公・私貿易の全体的実態の分析は今後の課題にしたい。

(2) これについては、田代和生『近世日朝通交貿易史の研究』(一九八一年)第六章参照。

(3) 外交的には一六〇七年(宣祖四〇、慶長一二)に渡日した「回答兼刷還使」の派遣によつて、朝日修好が回復されたとみなす見解が正説である。三宅英利『近世日朝関係史の研究』(文献出版、一九八六年)一四七―一七七頁。

(4) 「柳川一件」という御家騒動の経過とそれによる宗氏の独占的地位の確立などについては、田代和生『書き替えられた国書』(中央公論社、一九八三年)が有益である。

(5) 『増正交隣志』(巻一、兼帯)。田代和生『近世日朝通交貿易史の研究』(創文社、一九八一年)一四六頁。

(6) 従来歳遣船二〇艘(特送船三艘含む)の各々に對して接待が行われてきたことが、次の表1に示した通り、年例八送使を中心に応接が行われたので、これだけ見ても朝鮮側の接待費軽減が窺える。

(7) 田代和生、前掲書、第二、第三章が詳しい。

(8) この外「差倭」の定例化については、田代和生、前掲書、一六〇―一六三頁参照。

(9) 田代和生氏によれば、近世以後(特に一六三五年の兼帯制の実施以降)には「進上」という用語のかわりに「封進」にかわつたそうである。ところで一八六八年(高宗五、明治元)の朝鮮側史料『東萊府事例』(ソウル大学図書館奎章閣圖書)の第二冊の書契色に、「進上」の用語の用いられていることがわかる。例えば歳遣第一船の場合、「公賃價木十五同三十一疋十一尺六寸」と「進上價木十六同十一疋二十九尺一寸」と記している。

(10) 「換米の制」関係の史料、『公作米膳録』(ソウル大学図書館奎章閣圖書)の二冊中、第二巻には「公作米膳録」と書いているが、第一巻の表題は「公本作米膳録」であることがみつかふ。同史料の全期(一六三七―一七五一年)中いつごろからそう変

化したか明らかでないが、最初は「公木作米」とよばれてきたことが、その後「公作米」に縮約され、そのまま定着したのではなからうか。

- (11) 田代和生氏も指摘されている通り、八送使船の確立が「使船減少→貿易量縮少」を意味するのではない。勿論、朝鮮から接待をもらう船は減ったものの、渡航増加のための対馬藩の様々な工作によって、私貿易の拡大基盤が広がった。田代和生、前掲書、第三章。同氏「十七・十八世紀日朝貿易の推移と朝鮮渡航船」(『朝鮮学報』第七十九輯、朝鮮学会、一九七六年)。
- (12) ソウル大学図書館(奎章閣)圖書の『徴債謄録』(一六三七～一六七二年)には、対馬藩よりの債務返済の要求について記している。
- (13) 前記注(1)の通り、年例送使貿易(封進・回賜十狭義の公貿易)の概念で、田代和生氏の「官営貿易」にあたる。
- (14) 近世初期については、田代和生、「十七・十八世紀日朝貿易の推移と朝鮮渡航船」二四―二五頁の表4、一八二四年の公貿易については、同氏「近世後期日朝貿易史研究序説―『御山入積写』の分析を通じて―」(『三田学会雑誌』七九卷三号、慶応義塾大学経済学会、一九八六年)二二(二八五)頁の表5、そして一八四四年のそれは、同氏、「幕末期日朝私貿易と倭館貿易商人―輸入四品目の取引を中心に―」(『徳川社会からの展望』、速水融ほか編、同文館出版、一九八九年)三〇二頁の表13―1などが有益である。

(15) 前記の『東萊府事例』(一八六八年)にも八送使船の種類などはかわっていない。一方、以酏庵送使・萬松院送使・副特送使の派遣についての記録を要約すれば、次のようである(『増正交隣志』、卷一、年例送使条)。

以酏庵送使	萬松院送使	副特送使
<p>光海三年辛亥(一六一一)以下引用者) 玄蘇結庵於馬島聒驢山名以酏庵玄蘇死後受圖書送使其後玄昉偽托閔白濫圖公貿與調興同罪而至 仁祖十四年丙子(一六三六)収其圖書十六年戊寅(一六三八)復給之皆因島主之請資抵禮曹佐郎書契而來</p>	<p>光海十四年壬戌(一六二二) 島主平義智有功於約條時義智死後設院堂於鍾碧山號萬松院稱以為本朝誠心香火云資抵禮曹佐郎書契而來請船隻許之</p>	<p>本以受職倭平景直之以每年朝京難於跋涉乞受圖書而送使光海三年辛亥(一六一一) 始許之其後又言為本朝效誠宣力之功有倍於島主接待之禮宜加於島主特送之上朝廷又許之景直死其子調興襲受其船 仁祖十年壬申(一六三二) 調興罪廢島主平義成仍乞其船稱為副特送使資抵禮曹參議書契而來</p>

(16) 『蓬萊故事』(『朝鮮學報』五八輯、一三四頁)および田代和生、前掲書、一五〇頁の紹介によれば、近世初期の日本の輸出品は、胡椒・明礬・丹木・水牛角、銅・鐵・日本朱等である。一方、田代和生、「十七・十八世紀日朝貿易の推移と朝鮮渡航船」の表4の「錫」は、「鐵」を称するものとみられる。朝日貿易においては鐵は、鉛とか亜鉛、錫などの軟金属を意味するもので、朝鮮へ輸出された鐵は錫であつたといわれる(金柄夏『李朝前期対日貿易研究』韓国研究院、一九六九年、一五二頁)。

(17) 金柄夏、同書、第五・六・七章参照。

(18) 丹木(Sapanwood)の朝鮮側の俗称の原産地は東印度、胡椒の場合は印度のMalabarとかCeylon等地の熱帯アジアが主産地である(金柄夏、同書、一〇四頁、一三〇頁)。

(19) 胡椒や明礬、丹木などは、「長崎と対州江取寄朝鮮江被差渡り」と書き、朝鮮への輸出品を長崎貿易を通じて調達していた。一方、水牛角の場合は、「長崎唐商共江御詔御賣渡被下付」と記し、中国商人から中国産を調達して朝鮮へ輸出したのではなからうかとみなされる。『朝鮮公貿易且身代出入記録』(一七九〇年)。

(20) 朝鮮では丹木・明礬などが高級の染料とか薬材として用いられていた。また胡椒は肉類の調味料とか薬材として利用された。一方、水牛角(黒角とか弓角ともいう)の場合は、弓や品帯などの装身具および弓射製造用として珍重されていた。それで朝鮮の貴族階級には、銅とか硫黄よりも丹木や胡椒などの南海物産のほうがもつと歡迎を受けるほどであつた(金柄夏、前掲書、一〇四—一〇五頁、一三二頁および一五五頁)。

(21) 封進物と公貿物の品目・数量については、兩國の間に規定された条約によって厳格に区分されていたが、対馬藩にとつて、両者とも、名儀こそ異なれ、実質においては貿易にほかならなかつた(中村榮孝、前掲書、三二八頁)。

(22) 『朝鮮公貿易且身代出入記録』(一七九〇年)。

(23) 吹銅とは、荒銅を大坂の吹屋に送り、ここで更に精鍊されたもので、棹銅・延銅・丁銅などがこれである。一方、一八三二年(純祖三二、天保三)以降は水牛角が銅に換算し、吹銅三千斤で代納されることになった。田代和生「対馬藩の朝鮮輸出銅調達について―幕府の銅統制と日鮮銅貿易の衰退―」(『朝鮮學報』第六十六輯、朝鮮学会、一九七三年、一四七頁)。

(24) 荒銅とは、山元で掘出された銅を精鍊した銅であるものの、この銅には銀が多く含まれていることが特徴である。それで長崎貿易では荒銅を更に精鍊して銀を抽出した棹銅が専ら輸出とされてきたが、朝鮮貿易においてはそのまま荒銅が輸出されていたということは、近世貿易史上、特殊なケースだつたといわれている(田代和生、同右論文、一四七頁)。

(25) 田代和生、前掲書、八〇頁の表I-13の(2)。

(26) 当時の朝鮮においての水牛角に対する需要が多かつたことを反証しているのではないだろうか。先学の研究によれば、水牛

角は朝鮮において裝飾用よりも造弓材料として用いられ、3大国宝と珍重されたといわれる（『国宝有三 馬也牛也黒角也』）。金柄夏、前掲書、一五五頁。

(27) 公貿物の対象であつたものは銅をはじめ水牛角、丹木（八四五斤）であつたし、封進物の場合は、胡椒・明礬・丹木（四、九〇〇斤）と日本朱のほかの諸品物であつた。

(28) 当時の公貿易が定品定額制であつたものの、榎木総額には差がみられる。一八世紀中期の榎木が五七、四〇〇疋でこれより多かったが、一九世紀初頭に入ると、五六、〇〇〇疋で少し減っている。田代和生、前掲書、一五〇頁。

(29) 田代和生、「対馬藩の朝鮮米輸入と『倭館枡』——宗家記録『斛一件覽書』からみた朝鮮米の計量法——」（『朝鮮字報』第二二四輯、朝鮮学会、一九八七年）の二七頁によれば、万治三年（一六六〇）以降は「一俵＝京枡五斗三升」となるはずであるものの、『朝鮮公貿易且身代出入記録』（一七九〇年）には、すべて「一俵五斗入」と書いている。しかし明治二年（一八六九）の『朝鮮公貿易并諸送使所務積』（慶応義塾大学図書館所蔵）には、「一俵五斗三升入」と書いていることがみつかると。

(30) 私貿易取引用人参。

(31) 公貿易取引用人参。

(32) (33) 『朝鮮公貿易且身代出入記録』（一七九〇年）。

(34) 『朝鮮国王城焼亡且九送使約定取入之諸物及断り付御仁惠筋被仰上御金壹万両御拝借被蒙 仰候始終之覽書』（慶応義塾大学図書館所蔵）の「朝鮮公貿易去卯年より巳年迄滞且当年取入物及断り高」によると、一八三二年（純祖三一、天保二）の場合、榎木総額五八、〇五九疋中、二万疋↓白米（朝鮮米）、一万拾五疋↓人参そして九千八百八拾五疋↓現木綿などのように交換され、残木綿壹万八千八百五拾九疋が滞納されたことが知られる。つまり同史料の記録通りならば、少なくとも一八三四年（純祖三四、天保五）までは、このような形態に「換米の制」が運用されていたことではなからうかと考えられる。

(35) 森山恒雄氏も寛政二年（一七九〇）の人参貿易についてこの部分を引用されているが、史料の性格や換米制の運用実態については触れておられないようである（前掲『対馬藩』一〇五六頁）。一方、『右拝借御金御上納御有免筋御願立ニ付御身代之姿松平越中守様江被及御内意候記録』（長崎県立対馬歴史民俗資料館所蔵）の寛政元年（一七八九、正祖一三）九月廿五日条によれば、次のような幕府側（勘定奉行の久世丹後と久保田佐渡）よりの質疑があつたことがわかる。

朝鮮国方約定ニ而毎歳木綿を取入候、其内之木綿を以朝鮮之米ニ引替、對州之食用ニ致シ由、此米を取入候儀相止、米ハ日本之米を何方より成年買入由而、木綿ハ現式取入賣捌事ハ不相成候哉、木綿之價を以日本之米を買入候時、木綿之賣立代餘分有之、利潤可相見事ニハ無之候哉（後略）

要すると、公本の一部を公作米（あるいは人參）に交換する「換米の制」の運用についての幕府側の見解である。つまり換米分の木綿を現木綿にもらって、その販売代価で日本米を買入すれば、対馬藩側に利潤が出ることはないか、ということである。これについて藩側の答弁の要旨は次のようである。

覚 但木綿貳疋半を以白米壹石ニ引替候ニ相当り候

一 日本黒米八千八百八拾八石

朝鮮五斗入白米壹万六千俵を日本黒米ニ直シ候高

代銀四百四拾四貫四百匁

壹石五拾匁ニ日本ニ而買入候積

一 木綿貳万疋

日本ニ而賣立

代銀三百六拾貫匁

壹疋ニ付拾八匁之積

差イ銀八拾四貫四百匁

則損銀

つまり幕府側の意見通りすれば、八四貫四〇〇匁ほどの損銀をみるとされている。つづいて人參についても書いているが、その内容が本文の引用文とほぼ同じである。つまり、木綿二九、〇四五疋を日本で販売する場合の価格（代銀五二二貫八一〇匁）から、人參二四斤三二匁の日本での販売代銀（一八一貫五三〇匁）を引いた三四一貫二八〇匁を損銀として記している。木綿・人參・米などの輸入価格と日本での販売価格との差による利潤の問題については今後明らかにすべきである。

(36) 田代和生、前掲書、一五一、一五四頁。

(37) 田代和生、同書、一五五頁の表I-10に紹介しておられる「官営貿易輸入品」（一九世紀中頃）には、大豆・小豆をはじめ、各種の「雑物支給品」が混在している。官営貿易（＝封進＋公貿易）以外に支給された雑物が、その中に入っているわけである。

(38) 第三章の表8でみるように、雑物支給総額一二二貫二七六匁余が、対馬本土の物成高（一四八貫七一〇匁余）とか、公貿易輸出額（一六二貫一八九匁）の規模とほぼ同じ水準の大切な財政収入源であったことがわかる（表5と表9参照）。

三、対馬藩の財政構造と貿易利潤

周知の通り、一八世紀中期以降、朝日私貿易は確かに不振の状態に落ち込んでいた。それによる貿易利潤の減少が、藩財政の逼迫を加速化したことはいうまでもない。

しかし対馬藩の財政収入の中には、朝鮮貿易利潤のみがあることではない。幕府補助金とか、領地年貢米などもあるわけである。つまり対馬藩財政と朝鮮貿易との関係について論ずるためには、これらの諸収入源をも同時に考察せざるをえない。

それだけでなく、財政悪化の原因解明には、必ず財政収入と共に支出面をも考究すべきであるので、対馬藩の財政構造と朝鮮貿易との関係を財政収支の両面から窺うことにしよう。

1、藩政改革と藩財政

一八世紀中期の対馬藩における財政状況からとりあえず見よう。なによりも著しいことは、幕府からの補助金支給と、それにつづいた藩政改革であるといえる。

これまでの研究結果によれば、近世後期における幕府から対馬藩への拝領金は、一七四六年（延享三）の金一万両（寛延三年、停止）がはじめてである。¹しかし一〇年程後の一七五五年にまた金一万両（三ヶ年）が支給されることをはじめ、一七六三年には金一〇万両、そして一七七〇〜一七七五年までは毎年銀三〇〇貫が渡されるようになった。²翌年の一七七六年（安永五）より毎年金一万二千両もの拝領金が、一八六二年（文久二）まで対馬藩に支給されたことは、もう説明が要らないほどである。

同時期の他藩にはほとんど先例のなかった莫大な量の幕府補助金が、このように長期間にかけて、対馬藩に下賜

されたことは、どこに要因があつたのであろうか。史書の記録によると、一七六三年分（信使来聘件）以外は、ほとんどが「交易利潤なく勝手向難渋」がその根拠であつた。³

しかしながらこの時期の財政悪化は、対馬藩だけの問題ではなかつた。むしろ近世後期諸藩の一般的現象であつたともいえるかも知れない。にもかかわらず対馬藩に対する幕府からの補助が継続されていたことは、幕府の対朝鮮認識よりきたと見做すべきではなからうか。⁴

とにかく幕府からかなりの補助をもらうものの、そのかわり対馬藩は幕府からの「指示」を行わざるを得ない状態におかれる。つまり拝領拝借金を下賜する場合、幕府は「儉約」とか、「交易利潤拡大」などの付帯条件を付け、対馬藩に対して藩政改革を義務化したことである。

天明期における藩政改革も例外でなかつた。一七八七年（天明七）に行われた対馬藩の藩政改革も、やはり儉約、万事質素、家中人数・知行削減、分限相応の暮し方、そして朝鮮関係費用の節約などの幕府指示によつて実施されたことがもう明らかにされた。⁵

勿論、藩政改革の基調は、農政振興による諸職業繁殖におかれていた。これは朝鮮貿易の衰退にしたがう政策基調の転換であると同時に、他方においては鄉村零落の放置の不可能の意味でもある。⁶

しかし政策基調の転換は、一挙にできることでない。水田面積が今でも島の総面積の三％にすぎない対馬にとつては非常に難しい問題であつた。儉約を主体とした諸改革の断行も、その効果は期待以下の水準にとどまつてしまつた。⁷

したがつて藩政改革による財政逼迫の解消は、対馬藩にとってまだ解けていない宿題として残っていたのである。それでは天明期藩政改革の以後でもある寛政初期における財政状況は果してどうなつていたであらうか。

2、寛政初期の財政収入と貿易利潤

表4 幕府拝領金の用途 (18世紀末)

金額	支出内訳	残高
500両	拝借金5万両の上納	330両
1,820	大坂貸付金16,510両の上納	
6,000	江戸表屋敷入料1ヶ年分	
150	先年借金33,500両の年賦	
550	江戸表借金20,200両の年賦	
800	上三口6,700両の年利足金	
1,850	1790年2月借金12,380両の利足金	

資料：表2と同じ。

対馬藩の財政収入源はいろいろありうるが、大別すれば三つに分けてみることができる。以下には収入構成のそれぞれについて窺うことにしよう。

(1) 幕府補助金

一七七六年から一八六二年にかけて、対馬藩の幕府から年一万二千両の拝領金をもらったことはもう明らかにになった。朝鮮私貿易の「断絶」による財政逼迫を名分としてこの分が支給されてきたが、「私貿易断絶案」は、幕府拝領金を受けるための対馬藩による虚構だったことが、森 晋一郎氏の研究によって解明された。このような拝領金は、この頃（一七九〇年）にも下された。ところで一万二千両の用途についてみれば、表4のようである。

拝領金の半分位を占めている江戸表屋敷費用以外は、ほとんどが借金の上納および利足金に用いられたことがみられる。もう一つ注意すべきことは、残りの拝領金も、借金関係などにほとんどが支出されてしまつて、残金がわずか三三〇両にすぎなかった、という点である。

しかしこの拝領金が、対馬藩にとつて大切な財政収入（代銀七二〇貫一三匁、一両〓六〇匁で筆者計算）であつたのは確かである。

(2) 朝鮮貿易利潤

① 貿易利潤の勘定法

貿易品や貿易量についての記録はかなり残っているが、貿易より得た利潤関係の史料はあまり多くない。貿易発展期のそれについては田代和生氏によって明らかにされたが、その産出内訳に関しては必ずしも明らかではない。

つまり貿易利潤をめぐる輸出入品の原価や調達・販売などの諸経費、輸出利潤および輸入利潤に至るまでの諸資料が、いまのところ全く不十分である。対馬藩が複式簿記の会計方式を用いたかどうかともよく知られない。⁽¹⁰⁾現代会計学の目でみれば、不明瞭なところが多い。

本稿で用いた史料の勘定法の場合も例外でない。調達原価や経費などについての記録が明らかでない状態で、ただ輸出品の朝鮮への「調代銀」のみが書いている。輸入品の場合もほぼ同様である。日本で売立した場合は、それぞれの品物の「売立代銀」のみが総計されている。やはり販売経費や輸入利潤率については不明である。

つまり輸入品の販売総額（藩内用や倭館消費分は藩側の評価額）から輸出品の調達総額を引いた残りを「貿易利潤」とみなしているようである。諸経費などを勘案したとすれば、「輸出品利銀」と「輸入品利銀」との合計にあて⁽¹¹⁾るわけである。

品物の貨幣価値の基準として用いた「代銀」の問題も出てくる。この銀が何を称しているかについて同史料は直接には書いていない。但し銀を銀に換算した場合、「 $\text{壹匁ニ六拾文遣之銀〇〇貫を正銀ニ直如此}$ 」と記していること⁽¹²⁾がわかる。これは対馬および肥前領地における所務高のみに限られている。

これからみれば、輸出品の調達総額と輸入品の販売総額の代銀が「正銀」を基準としたことがわかる。また「六十文銭」を「正銀」に換算した時の比率は、 $\text{銀一匁一〇〇文で（史料上の比率）、六十文銭} \times 60 \div 100 \parallel \text{正銀にな}$ ⁽¹³⁾るわけである。

更に同史料は、 $\text{金} \downarrow \text{銀の換算率については、} \text{「壹両六拾目替之積」と、米} \downarrow \text{銀の計算は、} \text{「米壹石代銀五拾匁之積」}$ と、そして $\text{米} \downarrow \text{荒麦の計算の場合は、} \text{「米壹石之代荒麦貳石相渡い」とそれぞれ書いている。}$ ⁽¹⁴⁾この点については同史料の勘定法にしたがうことにする。

② 輸出品調達総額

表5 封進および公貿輸出額（18世紀末）

品 目	数 量	単 価	代 銀
胡 椒	4,100斤	822匁 9分 ¹⁾	33貫738匁
明 礬	1,400斤	216匁 5分 ¹⁾	3 貫 31匁
丹 木	5,745斤	608匁 1分 ¹⁾	34貫935匁
荒 銅	27,900斤	206匁 ²⁾	57貫474匁
吹 銅	6,500斤	229匁 ²⁾	14貫885匁
水 牛 角	435本	38匁 1分 ⁴⁾	16貫573匁
日本朱ほか7品			1 貫553匁
計			162貫189匁

注：1）百斤＝付掛物共

2）百斤＝付御定直段百九拾参匁＝別子荒銅＝振替い
増銀雑用掛物共相加

3）百斤＝付御定直段貳百貳拾参匁＝雑用掛物共相加

4）壹本平均

資料：表2と同じ。

表6 朝鮮国役人に対する音物（18世紀末）

品 目	数 量	単 価	代 銀
吹 銅	4,428斤	229匁 ²⁾	10貫140匁
大 豆	40俵 ¹⁾	12匁 ³⁾	480匁
丹 木	1,110斤	608匁 1分 ⁴⁾	6 貫750匁
計			17貫370匁

注：1）壹俵五斗入

2）百斤＝付御定直段貳百貳拾参匁＝雑
用掛物共相加

3）壹俵拾貳匁之積

4）百斤＝付掛物共

資料：表2と同じ。

前章でみたように、日本から朝鮮への輸出は、胡椒・丹木などの南方物産と、銅・日本朱などの日本国内産物が中心であった。史書の記録通り、それらをすべて代銀で評価したことが表5である。

胡椒代銀三三貫七三八匁をはじめ、日本朱ほか七品の代銀一貫五五三匁に至るまで、これらを総計すれば、銀一六二貫一八九匁に達することがわかる。つまりこの分は、対馬藩より朝鮮朝廷への封進物と公貿物輸出の代銀総額になるわけである。

同史料には、これにつづいて「朝鮮国役人訓導副判事以下音物」として、表6のように記している。前章での「使者に対する雑物支給」と同様に、これは純粋な貿易とはいえないものである。

にもかかわらず対馬藩側は、この分（代銀一七貫三七〇匁）を表5の封進・公貿易輸出代銀と区別しながらも、「此方方朝鮮江遣掛之品々調代銀」に含めている。一種の役人への賄賂（ロビー活動費）とみられる朝鮮の倭館派遣の役人に対する雑物を、はつきりと輸出総額に包含している。前近

代貿易における取引雑費用とみなし、一応史料の勘定様式にしたがうことにしよう。結局、一七九〇年頃（正祖四、寛政二）の対馬藩の朝鮮へ渡した輸出品の総額は、代銀一七九貫五五九匁になるわけである。

③ 輸入品販売総額

当時の貿易は物々交換であったので、対馬藩の渡した品物に対して、朝鮮よりもその相応の返物が支給された。とりわけ公貿易においては、表5に対する返物が、規定通り表7のように対馬藩に支給されていた。

封進・公貿輸出物と回賜・公貿輸入物の貨幣価値が必ずしも一致することではない。対馬藩と朝鮮朝廷の間には、実物中心の定品定額制、つまり封進・回賜と公貿物の種類と数量のみが定まっているだけであつたので、品物の価格変動によつてその貨幣価値総額には差異が生ずる可能性があるわけである。⁽¹⁶⁾

表7によれば、人参の代銀が六七貫九二五匁におよぶ。これは日本での販売価格である。公貿易で取引された人参は「禮単人参」と唱え、私貿易用人参より品質がよくなかった。それに加えて二〇年前の一七七〇年頃の直段（一斤当り五、六貫目位）より段々下がり、五、六年前（一七八五年頃）以来、一斤に平

表7 回賜および公貿輸入額（18世紀末）

品 目	数 量	単 価	代 銀
人 参	30斤140匁	2 貫200匁 ⁴⁾	67貫925匁
虎 皮	12枚	300匁 ⁵⁾	3 貫600匁
豹 皮	16枚	60匁 ⁵⁾	960匁
油布ほか6品			2 貫208匁7分
鷹	56居 ¹⁾		
公 木	56,045疋		
朝鮮米	16,000俵 ²⁾	50匁 ⁶⁾	444貫480匁
人 参	24斤32匁 ³⁾	7 貫500匁 ⁷⁾	181貫530匁
木 綿	7,000疋	18匁 ⁸⁾	126貫
計			826貫703匁7分

- 注：1) 内貳拾八居者朝鮮米四百貳拾俵ニ引替ひ事
 同貳拾八居者朝鮮米綿八百四拾疋ニ引替ひ事
 鷹之儀右之通米木綿ニ引替候付代銀付不仕、尤米者送使馳走米之高ニ相加、木綿者惣高之内ニ相加置申候
 2) 木綿貳万疋之代米、壹俵五斗入
 3) 木綿貳万九千四拾五疋之代人参如斯
 4) 壹斤平均 5) 壹枚平均 6) 朝鮮白米1俵＝日本玄米0.5556石および日本玄米1石＝銀50匁（以上、史料上の比率）で筆者計算。
 7) 壹斤賣立代平均
 8) 壹疋ニ付上中下平均

資料：表2と同じ。

表 8 年例送使に対する雑物支給額 (18世紀末)

品 目	数 量	単価	代 銀
朝 鮮 米	4,072俵2斗6升 ¹⁾	50匁 ²⁾	113貫125匁
大 豆	298俵1斗2升	12匁 ³⁾	3貫580匁
小 豆	13俵4斗1升	20匁 ³⁾	276匁
筆ほか22品			5貫250匁3分
計			122貫231匁3分

注：1) 壹俵5斗入，但屬代り物替米共

2) 表7の注(6)と同一。

3) 壹俵平均，但壹俵五斗入

資料：表2と同じ。

均二貫二〇〇匁に下落していたと同史料は記している。¹⁷⁾

虎皮と豹皮の代銀が、それぞれ三貫六〇〇匁と九六〇匁になっている。油布以外に紬、白布、白木綿、筆、墨などいろいろあったが、その代銀があわせて二貫二〇八匁余であり多くはない。鷹五六居の場合は、米(四二〇俵)と木綿(八四〇疋)に代納されたことがわかる。

公木の代銀に対しては、米・人參・木綿の三つにわけて書いている。「換米の制」によって、公木中二万疋(四〇〇〇同)が公作米一万六千俵に交換され支給された。勿論この分の一部は対馬藩の家中への扶助米や倭館消費米などに用いられた。¹⁸⁾しかし本稿では便宜上、朝鮮白米を日本米に換算し、玄米一石¹⁹⁾銀五〇匁(史料上の交換比率)の割合をもつて、換米分の代銀を算出してみた。その結果、朝鮮米一六、〇〇〇俵の代銀が四四四貫四八〇匁余に及んだ。

残りの公木中二九、〇四五疋は、人參二四斤三二匁にもらった。それを日本で売立し得た代銀が一八一貫五三〇目に達した。この分を規定通り木綿でもらったら三四〇貫目程の損銀を免れることができた、とみなすのが藩当局の観測である。¹⁹⁾

結局、残りの七千疋のみが現木綿で支給されるわけで、その代銀が一二六貫となっていた。寛政初期には、人參よりも木綿の価格条件が、対馬藩にとって更に有利であったのではないかと思われる。つまり公木五六、〇四五疋の代銀総額が七五二貫一〇匁余に及ぶわけである。

以上は対馬藩の封進・公買物に対する返物として、朝鮮からもらった分の代銀総計である。ところで第二章でも述べた通り、これ以外にも朝鮮朝廷からの

表9 対馬および領地収入（18世紀末）

品 目		数 量	単価	代 銀
対 馬	物 成 麦	5,948石 4 斗 2 升	25匁 ¹⁾	148貫710匁
	田物成米	384石 8 斗 6 升	50匁 ²⁾	19貫243匁
	小物成銭	六銭72貫382匁		43貫429匁 ³⁾
	運 上 銀	六銭125貫630匁		75貫378匁 ³⁾
肥前領地	年 貢 米	7,786石 8 斗 2 升	50匁 ²⁾	389貫341匁
計				676貫101匁

注：1）荒麦1石＝玄米½石＝銀25匁（史料上の交換比率）で筆者計算。

2）表7の注(6)と同一。但、朝鮮米と日本米の質の同一を仮定。

3）六十文銭×60÷100＝正銀

資料：表2と同じ。

雑物支給があった。表8に示したように、朝鮮米と大豆・小豆以下、その他雑物の支給がそれである。同じ方法によって、朝鮮米四、〇七二俵二斗六升の代銀を計算し、一一三貫一二五匁余を算出した。ほかは史料上の数値そのままである。大豆代銀三貫五八〇匁と小豆代銀二七六匁、そして筆ほか二品品の代銀五貫二五〇目余を含めて総計すれば、雑物支給の代銀総額が一二二貫二三一匁になることがわかる。やはり少ないとはいえない規模である。

年例送使貿易による輸入品販売代銀九四八貫九三四匁（表7＋表8）から輸出品調達代銀一七九貫五五九匁（表5＋表6）を引くと、貿易利潤が銀七六九貫三七五匁に達することが窺える。⁽²⁾

この利潤が対馬藩の財政収入においてどのくらいの比重を占めているか、という問題は、もう一つの収入源の「対馬および肥前領地収入」についての分析を必要とする。

(3) 対馬および肥前領地収入

幕府補助金と朝鮮貿易利潤は、その規模は大きい、根本的には安定な収入源であるのに間違いない。いつ補助金が中断され、またある瞬間に朝鮮貿易が断絶になるかわからない危険を内包しているためである。しかし以下に窺う「対馬および肥前領地収入」は、その規模は大きくはないが、相対的に安定的な収入源である。その意味では重要な財政収入源であったことは否めない。

『朝鮮公貿易且身代出入記録』によると、対馬および肥前領地での収

入は、次の表9の通りである。対馬島で生産された穀物は依然として少なかった。米の生産量はわずか三八四石余であった。麦は五、九四八石余を生産したが、これを米に換算しても(荒麦二石 \parallel 米一石)、当時の人口三万人の食糧としては、まったく足りなかった。島内生産米の二九倍にもおよぶ一、一五一石の朝鮮米が輸入されなければならなかった状況が、それを雄弁に物語っている。

そのほかに運上銀七五貫三八匁と小物成銭の代銀四三貫四二匁などが、財政収入の一部を構成している。前述のとおりこれは六十文銭を正銀に換算したものである(交換率、銀一匁 \parallel 銭一〇〇文)。

なによりも大切な収入源が肥前年貢米であった。史料の記録通り七、七八六石余が領地から送ってきた。同様な方法によつてこれを代銀に換算すれば、三八九貫三四一匁で、肥前田代の領地収入が、大切な比重を現わしていたことを窺わせる。つまり対馬島と肥前領地での諸収入をあわせれば、銀六七六貫一〇一匁余になるわけである。

それではいままで見てきた三つの収入源の総計はどのくらいになるか。幕府拝領金一万二千両(代銀七二〇貫一三匁)と朝鮮貿易利潤七六九貫三七五匁、そして対馬および領地収入分六七六貫一〇一匁などをあわせると、結局銀二、一六五貫五八九匁余に及ぶ。

とりあえず寛政初期の対馬藩財政における収入項目中、朝鮮貿易利潤が全体収入の約三六%を占めていることがわかる。公貿易のみの利潤であるが、それだけでも非常に比重が大きい。当時の朝鮮貿易の地位を窺わせるところである。

その次が幕府補助金で、全体の三三%に達する。それだけの補助を毎年もらうことになっていた対馬藩にとっては、幕府拝領金がどれほど大切な財政収入源であったかはここにも出ている。

対馬および肥前領地からの収入もおおよそ三一%に及び、財政収入源として結構高い比重をなしていた。しかしながら依然として幕府や朝鮮への藩外依存度が高かった。対馬藩にとって財政自立基盤の拡充が重要な政策目標であ

表10 対馬藩の諸入目構成（18世紀末）

区 分	入 目
対幕府関係	参府下向入目 江戸屋敷入目
対朝鮮関係	朝鮮国屋敷入目 輪番長老返送入目 年例送使費用 朝鮮江遣掛之品々調代銀
藩内政関係	神祭料 御先祖祭料 先々代先代対馬守様御子方入料 猪三郎様御衣食之料 御褒賞銀 武器方入目 厩方入目 船方入目 諸役所入目 諸番所入目 寺社入目 郡方入目 宗文改方入目 学文所入目 武藝稽古所入目 郷土郷足輕用心鉄炮備打稽古入目 諸仕立物方入目 俵物取立入目 火消方入目 作事方入目 賄方入目 盗賊方入目 旅役所入目 大坂長崎御屋鋪入目 借銀之利足上納金

資料：表2と同じ。

係をみれば、諸費用を三つのグループにわけることができる。参勤交代などの江戸経費や貿易関係費用および藩内政費用などがそれである。

ったことを雄弁に物語っている。

このような状態で、対馬藩はどのようにに財政支出を行なったか。財政悪化の原因の究明のためには財政支出の検討が肝要である。

3、寛政初期の財政支出と財政逼迫

藩の財政支出について細かいところまで考察することは容易なことではない。財政支出関係の史料が少ないこともその理由の一つである。ところで『朝鮮公貿易且身代出入記録』には、対馬藩の諸入目としてその細目が列挙されている。但、ほとんどが細目だけである。

それらを整理したのが次の表10である。財政収入の場合と同様に、対馬藩の内部を中心として幕府や朝鮮との関

表11—I 江戸経費（18世紀末）

貢 目		数 量	代 銀
参勤交代 (A)	参府献上参5斤 ²⁾		22貫600匁
	参府下向入料 ³⁾		225貫
	在府中当地屋敷手当増金 ⁴⁾		144貫
江戸屋敷 ¹⁾ (B)	拝借金5万両の上納	金 500両	
	大坂貸付金16,510両の上納	1,820	
	江戸表屋敷入料1ヶ年分	6,000	
	先年借金33,500両の年賦	150	700貫200匁 ⁵⁾
	江戸表借金20,200両の年賦	550	
	上三口6,700両の年利足金	800	
	1790年2月借金12,380両の利足金	1,850	
江戸経費 (A+B)			1,091貫800匁

注：1）表4と同一。

2）御参府之節献上之人参五斤吹銅を以引替ひ元代銀四拾五貫貳百目を二ヶ年ニ割一ヶ年之当り如此

3）隔年御参勤之積ニ仕一年者御参府一年ハ御下向、毎年片道海陸之御入料其外右ニ付而之諸用意方入目共ニ一ヶ年之当り金参千七百五拾兩程を銀ニ直シ如此

4）御在府中御当地御屋鋪御手当増金四千八百兩之積ニ御座いを二ヶ年ニ割一ヶ年之当り貳千四百兩を銀ニ直シ如此

5）金1両＝銀50匁。

資料：表2と同じ。

(1) 江戸経費

同史料にも幕府関係の費用についての記録が若干の程度はあるものの、江戸屋敷経費などに対しては詳しくない。⁽²³⁾しかし、ほぼ同じ時期の支出状況を窺わせる史料がある。これを整理したのが表11—IIである。⁽²⁴⁾

表11—Iによれば、参勤交代費用が銀三九一貫六〇〇目、江戸屋敷費用が同七〇〇貫二〇〇匁目で、結局江戸経費はおよそ銀一、〇九一貫八〇〇匁に達する。表11—IIのそれより一三三貫余少ないが、幕府拝領金の一・五倍におよぶかなりの規模で、幕府からの補助金の財政的役割を相殺してしまうことがわかる。対馬藩にとって大変重い財政負担になっていたことは間違いないだろう。

(2) 倭館および年例送使費用

対馬藩の対朝鮮関係によって要る諸費用は表12のようである。倭館屋敷や翰書長老派遣などの倭館運営経費が、米四、六七八石余（代

表11—II 『増減目録』からみた江戸経費（18世紀末）

区 分	貢 目	銀 額	年 度
参勤交代	参向供賄方入目	108貫723匁分厘毛	寛政元年 (1789)
	参向船掛入目 ¹⁾	28	
	在府十二月之入目	223	寛政三年 (1791)
	在府待請入目	120	
	下向供賄方入目	93,800	寛政三年 (1791)
	下向船掛入目	38	
	1ヶ年平均(A)	305貫762匁	
江戸屋敷 (B)	貞心院様入目	90,906,903	寛政三年 (1791)
	賄方入目	209,197,496	
	「大積帳」	14,944,376	
	「大積帳残物帳＝代銀付を以」	20,881.5	
	諸色買帳	111,571.14	
	若殿在府入目	148,320	
	借金年賦返済	323,535	
江戸経費	(A+B)	1,225貫82匁余	

注：1）登り40日，下り30日。 2）登り30日，待請30日，下り40日。

資料：『寛政年御入目近年之御入目差引増減目録』（東京大学史料編纂所蔵）

表12 倭館および年例送使費用（18世紀末）

貢 目	数 量	単価	代 銀
倭館屋敷および 翰書長老返送入目 ¹⁾	米4,678石5斗7升8合5勺 銀 84貫912匁	50匁 ³⁾	233貫928匁 84貫912匁
年例送使費用 ²⁾	米 699石4斗4升4合4勺	50匁 ³⁾	33貫472匁
計			352貫312匁

注：1）此銀米者御通交ニ付朝鮮国江御屋敷を設置對州ニ而茂右ニ相関り候，諸役所相立置い，諸用費且翰書長老返送入目其餘公貿易ニ付而之用費定式之分凡如此引之

2）年條送使江彼国方之馳走米を則彼召仕い御使者江被下之い分引之

3）玄米1石＝銀50匁（表7の注(6)と同一）。

資料：表2と同じ。

表13 倭館役人数 (18世紀末)

区 分		計
館 守	1人	馬回上下 18人
代 官 頭	1	同上下 13
二代官大小姓	3	上下 6
代 官 町 役	5	上下 4
改 頭 馬 廻	2	9
同佐役大小姓	2	6
同 徒 士	20	3
中 目 付	2	6
徒 士 目 付	2	3
醫 師	1	6
外 科	1	4
破 損 掛 侍	1	3
書 翰 書 役 僧	1	3
通 詞	10	3
足 輕	30	足輕目付共ニ
夫 之 者	20	
大 工	3	
番 船	2艘	壹艘ニ水夫30人乗
飛 船	3艘	同 8人乗
合 計		276人

資料：『朝鮮公貿易且身代出入記録』（1790年），対馬歴史民俗資料館所蔵宗家文庫記録類表書札方H①10(3)。

よう。

それ以外にも、年例送使に対する経費支出があつた。前述通り朝鮮より年例送使に支給された米四、〇七二俵（日本玄米で二、二六二石余）中、実際には使者に六六九石余のみが支給され、残りの一、五九〇石以上の米が藩庫に編入されたわけである。

つまり表12に示したように、銀三五二貫三一二匁余の経費が朝鮮貿易関係に払われたといえよう。私貿易関係の費用がこれに含まれていたかも知れない。以上の経費で公貿易のみを行なっていたとはいいたいのではなからう

銀二三三貫九二八匁余、但し米一石
 〓銀五〇匁と銀八四貫九一二匁と
 書いている。これもかなりの規模で
 ある。

おそらくこれは次の表13と何とか
 関係のあるのではないだろうか。「朝
 鮮江被召置候人数」として記してい
 る史料の内容からみれば、倭館人数
 は館守をはじめ代官、改頭馬廻、醫
 師、書翰書役僧から大工などに至る
 まで、およそ二七六人におよぶ。こ
 れら諸役人に対するいろいろな経費
 を払わなければならなかったといえ

表14 藩内政費用（18世紀末）

貢 目	数 量	単価 ⁷⁾	代 銀
京都大坂長崎借銀手当 ¹⁾			366貫
対馬輪番長老手当 ²⁾	米 100石	50匁	5貫
家中扶助 ³⁾	米 8,761石 8 升	50匁	438貫 54匁
	荒麦 2,809石 4 斗	25匁	70貫235匁
地方知行・寺社支給 ⁴⁾	荒麦 2,402石 3 升	25匁	60貫 50匁
神祭料ほか ⁵⁾	米 1,628石 1 斗	50匁	81貫405匁
	荒麦 726石 9 斗 9 升	25匁	18貫174匁
肥前領地費用 ⁶⁾			23貫
計			1,061貫918匁

注：1）右京大坂長崎三ヶ所之御借銀相補候手当の事、右内訳之口々手当銀

2）輪番長老江對州ニ而之手当1ヶ年分

3）御家中人数郷土共ニ千百拾人之内、郷土參百五拾六人地方知行故引之、残七百五拾四人ニ朝鮮通辨之者船手之者足輕小者等ニ至而七百八拾八人、都合人数千五百四拾貳人ニ扶助米如此

4）對州一国之物成麦五千九百四拾八石四斗貳升之内、御家中地方知行之分并寺社之給地其外郷村ニ付の口々之給分等

5）神祭料御先祖祭料先々對馬守様御子方猪三郎様御兄弟御食料且御家中以下之者共旅勤ニ被召仕の節、兼而御借上ニ相成居の米之内割合を以相渡、且御救米御褒賞米諸御役人役料米其外作事方ニ召仕の職人之飯米窮民扶持百姓生子養育麦土地川普請ニ召の郷夫之飯米等1ヶ年ニ凡如此

6）彼地御屋敷之諸入目土地川之普請入目扱又年貢米對州江差廻候船賃等之銀高

7）表9の注(1)・(2)と同一。

資料：表2と同じ。

かと考えられる。

(3) 藩内政費用

藩内向けの費用もかなり多かったことは、表14でみるようである。藩内政支出が銀一、〇六一貫九一八匁余におよび、対馬と肥前領地収入より一・五倍以上も多い。

細目別にみれば、借金関係が全体の三割に達する。借金が累積していた当時の状況が窺える。家中補助費もおよそ同五〇〇貫目に及び、総支出の四七・八％を占めている。藩政の自立基盤拡充とはほとんど関係のない支出の比重が多かったといえるよう。

それ以外にも、寺社支給や神祭料

などいろいろあったものの、その規模は大きくなかった。むしろ支出総額の八割程を占めていた借金関係や家中扶助費の過多支出が問題であったのではなからうか。

表15・図5でみるように、寛政初期における対馬藩の財政支出は、江戸経費（四三・四％）、藩内向けの費用（四

表15 対馬藩の財政状況（18世紀末）

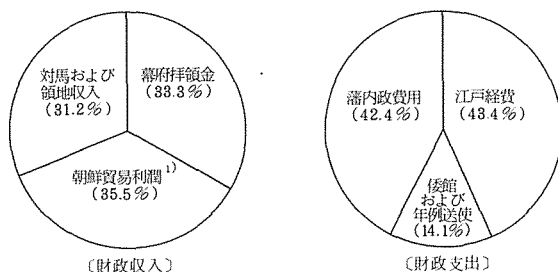
歳 入		歳 出	
幕府拝領金	720貫113匁 (33.3%)	江戸経費	1,091貫800匁 (43.4%)
朝鮮貿易利潤 ¹⁾	769貫375匁 (35.5%)	倭館および 年例送使費用	352貫312匁 (14.1%)
対馬および領地 収入	676貫101匁 (31.2%)	藩内政費用	1,061貫918匁 (42.4%)
計	2,165貫589匁 (100.0%)	計	2,506貫30匁 (99.9%)

※財政赤字＝(歳出－歳入)＝銀340貫441匁余。

注：1) 私貿易不包含。

資料：表5～9および表11・12・14より作成。

図5 対馬藩の財政収支構成（18世紀末）



注：1) 私貿易不包含。

資料：表15より作成。

二・四％、そして朝鮮関係費用（一四・一％）の順に大きい比重を占めていた。

財政収入総額を上廻る不足分、銀三四〇貫四四一匁余が、対馬藩の財政赤字になるわけである。これはたしかに藩財政を圧迫したはずであり、赤字分はどうしても充当しなければならなかったのである。

それではこのような財政悪化がどこからはじまったか。いままでの分析の結果を総合しながら藩財政窮乏の問題を整理してみることしよう。

4、藩財政窮乏と朝鮮貿易

寛政初期における対馬藩の財政状況を示したのが表15と図5である。

とりあえず歳入面をみれば、三つの収入源がほぼ均衡をなしているものの、朝鮮貿易利潤の財政収入上の高い比重が著しい。一七九〇年頃の公貿易利潤のみが、銀七六九貫三七五匁で収入総額の三五・五％を占めている。私貿易利潤を除外したこともかわらず、むしろ幕府拝領金（三三・三％）や対馬・肥前領地収入（三一・二％）より

も高い比重を占めていることは注目すべきである。

更に本稿の基本史料が、「貿易利潤の減少→藩財政悪化」を理由とし、幕府に対して財政支援を要請するための報告資料であるという史料の性格を勘案すれば、貿易利潤の規模が少なくともこれより少くないだろうと考えられる。

一方、歳出面では、むしろ朝鮮関係の費用が最も少なく、歳入と著しい対照をなしている。倭館屋敷費用に年例送使経費さえ含めても、銀三五・二貫三二・二匁で支出総額の一四％にすぎないことがわかる。江戸経費（銀一、〇九一貫八〇〇匁⁽²⁷⁾）や藩内向けの費用（一、〇六一貫九一八匁）の規模が、それぞれ朝鮮関係費用の約三倍に及んでいた。つまり朝鮮関係の財政収支のみが黒字を記録していた。

これからみると、対馬藩財政の逼迫原因を直接に朝鮮貿易の衰退とみなすことは早すぎるのではなからうか。「貿易の衰退→財政の悪化」と両者を直線的に結びつけることは必ずしも適当ではなく、むしろ支出面の問題も検討されるべきであろう」とみなされる鶴田 啓氏の論旨は、その面では妥当であると思われる⁽²⁸⁾。

一八世紀後半の朝鮮貿易が、貿易繁栄期に比べ、不振から逃げられなかったことはいうまでもない。貿易から得られた利潤の規模も一八世紀中半以降に至っては激減した。元禄七年（一六九四）の貿易利潤が銀二〇、四三・一貫余、同一四年（一七〇二）のそれが銀五、〇〇〇貫余に及んでいたことをみると、一七九〇年頃の公貿易利潤（銀七六九貫余）はたしかに少ない⁽²⁹⁾。

このごろの財政収入高も幕府拝領金を除けば、銀一、四五〇貫余になって、元禄十一年（一六九八）のそれ（三、〇六〇貫余）より半減していた⁽³⁰⁾。元禄期の収入高が諸費用を引いたものであるから、寛政期の収入規模はさらに縮小されたことが推察できる。通常十萬石の格式を維持してきた対馬藩にとっては、幕府拝領金を要求せざるをえなかった状況におかれていたといえよう。

しかしながら、それが直接に対馬藩財政収入における朝鮮貿易の地位低下を物語るとはいいたいのではないだろうか。更に藩財政逼迫の決定的原因が貿易利潤の減少であったとみなす見解は、必ずしも妥当であるとはいえないと考えられる。

ほかの条件が一定である状態で、いくら貿易利潤が増加しても、財政支出がそれ以上に拡大してしまったら、財政赤字は必至のことである。また貿易利潤が減少しても、それ以外の収入源の急増が伴わなければ、歳入面での貿易利潤の相対的比重は激減しない。こういう点からみて、近世後期対馬藩の財政構造においての朝鮮貿易利潤は、幕府拝領金と共に無視しがたい存在であったのではなからうかと思われる。

注(1) 鶴田 啓「一八世紀後半の幕府・対馬藩関係―近世日朝関係への一視角―」〔朝鮮史研究会論文集〕第二三集、朝鮮史研究会、一九八六年）一五六頁。

(2) 同右、一五六頁。

(3) 同右、一五九頁。

(4) 寛政期については、鶴田 啓「寛政改革期の幕府・対馬藩関係」(田中健夫編『日本前近代の国家と対外関係』、吉川弘文館、一九八七年)が有益である。

(5) 長野 遼「天明・寛政期における対馬藩の藩政改革の一考察」〔佐賀大学経済論集〕第五巻第一号、佐賀大学経済学会、一九七二年)五〇頁。

(6) 同右、五一―五二頁。

(7) 同右、五〇頁。

(8) 森 晋一郎「近世後期対馬藩日朝貿易の展開―安永年間の私貿易を中心として―」〔史学〕第五六巻第三号、三田史学会、一九八六年)。

(9) 一六八四―一七一〇年にかけての対馬藩の貿易利潤を「輸出品利銀」と「輸入品利銀」と区別し、その合計を算出しておられるが、算出内訳および方法などについては書かれていない。田代和生「近世対馬藩における日鮮貿易の一考察」〔日本歴史〕第二六八号、日本歴史学会、一九七〇年)九〇頁。

(10) 西川 登「寛政期の三井両替店一卷新元方とその勘定目録」(『佐賀大学経済論集』第一六卷第三号、一九八三年)によれば、当時の三井家には複式簿記の勘定法が用いられていたことがわかる。

(11) 注(9)と同じ。

(12) 『朝鮮公貿易且身代出入記録』(一七九〇年)。

(13) 「六十文銭」や「九十文銭」などについては次のことを参照。田代和生「幕末期日朝私貿易と倭館貿易商人―輸出品目の取引を中心に」(『速水融ほか編「徳川社会からの展望―発展・構造・国際関係―」、同文館出版、一九八九年) 三〇―三二頁。

(14) 『朝鮮公貿易且身代出入記録』(一七九〇年)。

(15) 表5-8の輸出・輸入品の単価が、三四年後の文政七年の単価より、輸出品の場合は過大評価、輸入品の場合は過小評価されていることがわかる。例えば、寛政期の胡椒の調達価が一斤当り八匁二分であつたのに対して、文政期のそれが三匁三分で、寛政期のほうが高い。一方、輸入品の大豆の場合、一俵当り、寛政期には一二匁、文政期には二四匁で、寛政期のそれが安い。三四年ほどの時差や銀の相場率などの問題があるものの、寛政期の幕府報告資料という史料の性格から出てくる史実の歪曲の可能性を窺わせる。つまり本稿での貿易利潤が過小評価されていた可能性があるのではなからうかと考えられる。文政七年の輸出・輸入品の単価については、田代和生「近世後期日朝貿易史研究序説」(一九八六年)二二頁。

(16) 公貿易をめぐる両国間の紛争には品物の質の問題だけでなく、その価格変動から生じた場合も少なくない。

(17) 『朝鮮公貿易且身代出入記録』(一七九〇年)。

(18) 倭館消費分と藩家中扶助分は、それぞれ朝鮮関係費用と藩内政費用として、歳出部門に包含させた(第三章第三節参照)。前章でみたように珍しいところであり、今後考察すべきである。

(20) 封進・公貿易輸出額が銀一六二貫余であつたことをみると(表5参照)、雑物支給の代銀総額(一二三貫余)が少なくない規模であつたことがわかる。

(21) 『朝鮮公貿易且身代出入記録』(一七九〇年)には、「私貿易用」とみなされる銅五一、二九七斤の利銀銀六二貫八五八匁を含め、貿易利潤として「米五、八〇三石三斗七升七合一勺(日本玄米に換算)と銀一八九貫七七一匁」と記している。しかしこれは、(イ)倭館屋敷および貿易関係の諸費用(表12参照)をすべて引いたものであり、(ロ)朝鮮米の代銀もわかりがたい。(ハ)また私貿易での銅輸出力銀も、これだけでは当時の私貿易の状況が窺えない。そういうわけで筆者は、本文のように朝鮮米の代銀を計算した上で、(輸入品販売総額―輸出品調達総額)を「貿易利潤」とみなし、これを歳入部門に入れた。朝鮮関係の諸費用は歳出部門に含ませた(注(18)参照)。一方、私貿易での銅輸出力銀は、本稿では「公貿易」の範疇

から除外した。

(22) 田代和生「近世の日朝関係と対馬」『朝鮮史研究会論文集』第二六集、一九八九年）七頁。

(23) 『朝鮮公貿易且身代出入記録』（一七九〇年）では、前述の表4が「江戸屋敷費用」にあててるのではなからうかと考えられる（表11—I・II参照）。

(24) 『寛政年御入目近年之御入目差引増減目録』（東京大学史料編纂所蔵）。表11—I・IIを比較してみると、江戸経費の総額に差がある。参勤交代費用は表11—Iが、江戸屋敷費用は表11—IIのほうが多い。つまり全体的に銀一三三貫余の差があるものの、当時の江戸経費が同一千貫以上のかんりの規模であったことがわかる。

(25) 『朝鮮公貿易且身代出入記録』（一七九〇年）には、煎海軍などの貿易を通じて、私貿易で銀六二貫八五八匁余の利潤が得られたと書いている（注（21）参照）。しかしながら三四年後の一八二四年の私貿易利潤が、銀七〇九貫二三匁であったと明らかにされた（田代和生「近世後期日朝貿易史研究序説——御出入積享」の分析を通じて——、一九八六年、二五（二八九頁）。この点を勘案すれば、寛政初期における朝鮮私貿易の利潤がこれよりもっと大きかったのではなからうかと考えられる。

(26) 鶴田 啓「寛政改革期の幕府・対馬藩関係」（一九八七年）六八三頁。

(27) 一七九〇年頃の対馬藩の江戸経費は、財政支出総額の四三%を占め、ほぼ同時期の加賀藩（寛政二年、五四%、同三年、四七%）のそれより若干少ない。しかし大体歳出総額の半分に及び、参勤交代などの財政負担が、対馬藩にとっても決して軽くなかったことを示唆する。田畑 勉「寛政・享和期における加賀藩財政の構造について」（『地方史研究』第二一卷）三頁、地方史研究協議会、一九七一年）一四—一五頁。また佐賀藩の江戸経費（明暦元年、四九・六%、同三年、七八%）については、長野 暹「幕藩制社会の財政構造」（大原新生社、一九八〇年）二〇三—二〇五頁。

(28) 鶴田 啓「天保期の対馬藩財政と日朝貿易」（一九八三年）七六頁。

(29) 田代和生「近世対馬藩における日鮮貿易の一考察」（一九七〇年）九〇頁。

(30) 田代和生「近世日朝通交貿易史の研究」（創文社、一九八一年）二六二頁の表11—9。

四、むずびにかえて

一七世紀中期以降、発展に発展を重ねてきた朝日貿易は、近世後期になると、著しく不振になった。年例送使船別に貿易品目や数量について規定されていた公貿易も例外ではなかった。私貿易よりは減少率が遅かったものの、公貿易も衰退しつつあった。朝鮮貿易についての依存度が高かった対馬藩にとっては大変深刻な問題であった。

現実的に財政逼迫におかれていた対馬藩は、朝鮮（私）貿易の「断絶」↓知行の減少という名分下に、利潤減少分だけの「財政援助」を幕府側に要求するようになる。対馬藩を通じた従来の朝鮮外交問題をめぐっているいろいろ対策を熟議してみたが、結局、幕府は対馬藩による外交実務の持続を決定するに至る。これはいうまでもなく、貿易利潤の減少分に対する幕府よりの補助金支給を容認することを意味する。

このごとき状態が、朝鮮貿易不振―藩財政悪化―幕府補助金支給というふうに図式的にいわれ、藩財政窮乏と貿易衰退との両者を直接に結びつける視角がこれまでも強く残っている。

貿易利潤の減少が藩財政逼迫に悪影響を及ぼしたことは確かである。しかし藩財政悪化の決定的原因を朝鮮貿易の衰退とみるには疑問が残る。対馬島の水田面積の狭小や過重な財政負担などを勘案すれば、財政悪化の問題は歳入と歳出の全体的構造上で把握すべき問題であるためである。

本稿で用いた史料は対馬藩の対幕府文書であった。貿易の過小評価や歳出の過大評価などの史料上の歪曲可能性がないわけではないものの、藩の公式文書をもって藩の公式見解（朝鮮貿易衰退↓藩財政悪化）について検討するところに本稿の目的を置いたためである。

分析結果、いくつかの暫定的結論を得た。寛政二年（一七九〇）ごろの場合、財政収入面では、貿易利潤（三六％）、幕府拝領金（二三％）、対馬と肥前領地収入（三一％）の順に、高い比重を占めていた。公貿易のみの利潤で

あるにもかかわらず、朝鮮貿易利潤の歳入上の比重が決して少なくなかったことがわかる。

一方、財政支出面では、江戸経費（四三％）、藩内政費用（四二％）、朝鮮関係費用（一四％）の順序に、高い比重を現わしている。貿易利潤の高い比重に比べ、朝鮮関係の費用は相対的に多くはなかったといえる。朝鮮関係の財政収支のみが黒字を記録していたことも注目すべきである。

貿易衰退↓藩財政悪化という藩側の主張が、これからみると、藩の公式文書を通じて把握しても、必ずしも妥当であるとはいいがたい。藩内財政自立基盤の脆弱性や参勤交代、家中扶助などの封建秩序維持費の過重負担などいろいろな収支両面の問題にも財政悪化の根本的原因があつたことを認めざるをえない。

もう一つ注目すべきことは幕府拝領金の支給である。年一万二千兩の巨額の補助金がかかなり長い間（一七七六一八六二年）にかけて支給されたことは、幕府の対朝鮮認識の重要度と藩財政悪化の深刻性を物語っている。近世後期に至ればいたるほど対馬と肥前領地収入高の割合がたくなつていった点も特徴である。それにもかかわらず対馬藩にとって朝鮮貿易が依然として無視できない存在であつたところに、当時の貿易や財政の実体が隠されていたのではないだろうかと考えられる。

（追記）本稿の作成にあたって、多方面の御教示と御協力があつた。古文書の講読から論文作成に至るまでの長野遯先生の御指導をはじめ、貴重な史料の閲覧や撮影を許された長崎県立対馬歴史民俗資料館と慶応義塾大学図書館の方々、そして論文や資料紹介を頂いた田代和生、鶴田啓、森晋一郎の諸氏に感謝申し上げたい。日本留学の機会を開いて頂いた韓国の全南大学の朴光淳先生にも心から御礼を申し上げる。（鄭 成一）

（一九九〇年一月二十日成稿）